

《黙想会の講話・復活祭（四旬節）を迎えるための準備》

あともう少し、3週間程でイエス様の復活を祝います。しかし復活が私達にとってどういう意味か、どういう意味として私達が受け入れるかが重要なテーマとなります。カトリック信者、キリスト教信者とは一言でどういう意味だと思いますか？キリストを信じる者を意味しますよね。しかし何で私達はイエス・キリストを信じているのか。何故信者になってイエス様と共にこの人生を歩もうとしているか。この世には仏教、イスラム教等たくさんの宗教がありますが、その中で何故私達はカトリックを選んだのか。もちろん自分の意志ではなく、幼児洗礼を受けたからという人もいるでしょう。根本的に何故私達がイエス様を信じているかということは重要なテーマですし、私達の信仰の基礎でなければならないと思います。

キリスト教は何かということを一言で言うと「イエス・キリストがその死と復活を持って、私達に永遠の命を与えて下さった」ということが大きなテーマです。イエス・キリストがどういう人かによって私達の信仰生活に意味があると思います。

イエス・キリストが他の有名な人々と異なるのは、秘蹟を起こす力、また復活されたから信じるのではないのでしょうか。教会に来てお祈りするとそのことを神様がかなえて下さるという意味もありますが、もっと大切なのはイエス・キリストの復活によって、私達も永遠の命を得られるという確信、希望があるから私達はイエス・キリストを信じるのです。

イエス・キリストという言葉も一つの言葉ではないですね。「イエス」と「キリスト」という二つの言葉が一つになっています。「イエス」は人の名前で、当時はありふれた名前でした。旧約時代のモーゼの後継者「ヨシュア」から来ていますので、当時は「ヨシュア」のようになって欲しいと名付けられた名前でした。では「キリスト」はどういう意味があるのでしょうか。「救い主」です。ヘブライ語のメシアから来ています。ですからイエス・キリストとは「イエス」という普通の人間が救い主である「キリスト」になったとういうことを意味しています。私達はお祈りする時、いつも最後に「私達の主イエス・キリストによって」と結びます。イエス・キリストが一つの言葉であって「イエス様こそキリストだ。イエス様こそ私達を救って下さる、永遠の命を与えて下さる存在だ」と私達は祈る時に思い、誓います。しかし何故イエス様がキリストになるか。それは立派な人だから、奇蹟を起こしたからイエス様はキリストだと思っただけではなく、イエス様が死にうち勝って復活されたから、十字架につけられ死に葬られても神様の力によって復活されたから、私達にとってイエス様がキリストになるのです。

その復活という意味は普通の、蘇生、蘇りとは全く違います。聖書にもラザロをイエス様が蘇らせるという場面がありますが、「復活」という言葉は使いません。もちろんイエス様にも蘇るという言葉を使いますが「復活」とは違います。復活とはラザロの様に死者から蘇生してある程度生きてまた死ぬことではなくて、蘇ることによって永遠に生きることです。復活とは私達の想像を遥かに超える言葉だと思います。そして単なる「四旬節が終われば復活になる」という意味ではなく、私達がこれから「生きられる」様な生活としての復活をきちんと考えなければなりません。

私達は喜びの復活を迎えるために色々な準備をします。今日、この太田教会では復活を迎えるための黙想を計画して私が招かれました。この黙想や赦しの秘蹟を皆様は受けておられますが、その黙想や赦しの秘蹟が単なる「年間行事」になるのは悲しいことです。他の教会でも四旬節や復活節には黙想会等が催され、素晴らしい話を聞くことができます。しかしその話を聞いて「あー、いい話だった」と終わってしまうと本当の意味を失ってしまいます。復活の喜びを感じるための私達の心の準備が必要です。妊娠した母親は生まれて来る子供のために色々な準備をします。時にはタバコを止めたり、

ご主人となるべく言い争いをしない様にしたり、良い音楽を聴いたりと女性が母親になるための努力は色々あります。それと同じ様に、“復活された”イエス様を迎えるための心の準備は大切だと思います。それで皆様は平日や日曜日のミサの前に赦しの秘跡を受けています。しかし赦しの秘跡を考える時、「告解する」「告白する」という意味が強いのではないのでしょうか。“許し”と“告白”は違います。“告白”は自分が犯した罪に対して一方的に言い表すということです。しかし教会で設けた“赦しの秘跡”は、「自分は悪いことをしました。反省します」と一方的に伝えるのではなく、それを告白する人とそれを許してくれる神様、司祭がその役割をしていますが、お互いに理解し合って、人が新しく生まれ変わる様な意味として赦しの秘跡があります。しかし大半の人々が自分の犯した罪を司祭の前で言わなければならないという圧迫感を感じるから、なかなか赦しの秘跡を受けられないのではないかと思います。だから赦しの秘跡は、自分の過ちを言い表すということだけではなく、必ずイエス様が司祭を通して許して下さるという確信が前提にならないと許しの本当の意味がなくなるのではないのでしょうか。ですから、私達が赦しの秘跡を受ける時、「いやだな、自分のことをどう見られるのか」と思ってしまうこともあります。必ず許して下さるという確信をまず持つことが必要です。しかしその赦しの秘跡を受ける時には、自分の方からの準備が必要です。

皆さん、朝何を食べましたか？パン？ごはん？断食？皆さん、今朝のことだから覚えていらっしゃるでしょう。昨日は何を食べましたか？先週の月曜日は？特別な行事などがあれば覚えていますが・・・1ヶ月前となるとどなたも覚えてはいらっしゃらないでしょう。それは当たり前ですし、忘れないと困ることにもなります。

もし、イヤなことを聞き、それを忘れないと眠れなくなってしまう。だから忘れた方が良いこともあります。私達はすぐ忘れてしまう人間です。告解をするためには、毎日告解をするのであれば別ですが、大体の方が年に1回～2回ですか？そうすると1年前から今日まで自分が一体何をしたか、どの様な悪いことをしたか、どの様な良いことをしたかということのを反省し、考えないと告白することが思いあたらないですよね。告解しようという気持ちを持ったなら、反省というよりはまず1年を振り返って、どういうことが起こったか、どういうことをしたか等を振り返る時間が必要だと思います。その様な反省をする時間がないから告白する時も「特に罪はないです」ということになってしまいます。それでも神様は許して下さいます。それは本当ですよ。告解をしようとしてもまず自分の心がすっきりしないと、いくら司祭を通して許してもらっても心がきれいににならない。すっきりしない。すっきりするためには、まず自分がどの様なことを行ったかを考えるべきです。もちろん人から傷つけられたことはすぐに思い出すことが出来ます。しかし人を傷つけたことはあまり思い浮かんで来ないものです。告解を受ける前の準備としても10分、20分深く自分の生活を振り返って考える必要があります。その深く考えるということは、悪いことばかりではなく、その中での嬉しいこと、幸せだったこと、全部を考えながら「あの時も神様が一緒にいて下さった」と思い返すことが大切です。

イエズス会を皆様ご存じでしょう。私達の神様の名前を付けた修道会です。イエスという名前を付けたということは、それだけイエス様に対する確信、イエス様に対する信仰が強かったということです。イエズス会は論理的な部分においても教会の教えをきちんと守っています。その修道生活を少し考えてみると、お祈りより自分を反省する時間をしっかり守っています。修道院ですから朝の祈りから寝る前の祈りまでありますが、その祈りには参加しなくても大きな問題にはなりません。しかし1日10分、15分の自分を反省する時間は必ず取らなければなりません。お祈りは私達にとって一番大切なものですが、イエズス会ではお祈りより反省する時間を守らなければなりません。何故お祈りより反省することが大切か。お祈りはもちろん私達と神様が会話する時間だと思いますが、人間が成長して行くためには、やはり自分を深く見つめ反省して行くことが優先だと考えるので、自分の1日を振り返る様な時間を取ることを勧めています。

私達が祈る時、自分の望みや他の人が悩んでいることを思い返します。それはそれで大切なことですが、私達は自分のことを振り返ることがなければ成長して行くことが出来ません。その一環として

赦しの秘跡があります。ただ許してもらえば良いということではなくて、赦しの秘跡を受けるために自分が成長して行く、それがないと何度赦しの秘跡を受けても心は全然変わりません。ですから、赦しの秘跡を受けるためには、まず心の準備をする必要があると思います。そしてその準備に加えて、今度は神様が「私達の心を癒して下さる」ということを信じることです。ただ許してもらう、何か悪いことをしたからそれを神様に許して頂く、きれいにして頂くことに留まるのではなく、今度は自分の心がきれいになって「イエス様に似て生きること」ができる様な者になれるということを確認する必要があります。

ルカ福音書の中の「放蕩息子」の話をご存じでしょう。2人の子供のうち、弟は貰った父親の財産を使い果たし、ぼろぼろの状態に父親に謝ろうと思いついて帰って来ます。その息子を父親が許すという話です。この話は“放蕩息子”に焦点が当てられているようですが、しかしイエス様がこのたとえ話をなさったのは放蕩息子のことではなく、慈しみ深い父親のことを説明するためでした。何故かと言うとイエス様は罪人だと言われている人々と一緒に食事をしましたが、ファリサイ派の人達が「汚れた者と一緒に食事をすると自分まで汚れる」と考えていたからこの話をしました。ぼろぼろになった息子が、自分の過ちに気付く、父の元に帰った時、それを見つけたのは父親でした。「まだ遠く離れていたのに父は彼を見つけて、哀れに思い走り寄り首を抱き接吻しました」と聖書にあります。普通に考えれば、自分の子供だとはいえ許せるものではありません。しかし「まだ遠く離れていたのに」とは、いつ帰って来るのだろうか心配して、いつも待っていたということです。「もう子供ではない。帰っても許さない」と思っていたら、外で待つことはありません。でもその子を待つ外にいたから父親が子供を見つけたのです。“遠く離れた”ということはある程度距離があったと思います。たぶん息子は家を離れた時はお金があったから、着ている服も豪華な物だったでしょうが、戻って来た時は物乞いのような服装でした。その姿を父が見たとしても、それが自分の子供であると思えない姿であったと思います。遠い所にいて、服装も変わっていても父が先に見つけたということは「いつか息子は戻って来る」と信じ、深い愛情を持って待っていたからです。「父は彼を見つけて哀れに思い、走り寄った」のです！ただ子供が来るのを待っていたのではなく父から息子に走り寄ったのです。何歳かは分かりませんが、子供が帰って来たこと、自分の前に現れたということだけでも本当にうれしくて走って行ったのです。

だから私達が神様に自分が過ちを犯したことを告白するということは、私達が告白する前から、神様は私達のことを知っているのです。ただ私達が心を開ければ、すぐそれに対して恵を与えて下さるという存在が神様なのです。だから私達が告白する時、私達より私達を知っておられる神様がいらっしやることを考えれば、もっと気持ちを楽にして赦しの秘跡を受けることができるのではないのでしょうか。それでも「罪はないよ」と思う方もまだ大勢いらっしやると思います。特に日本人の場合はなるべく相手に迷惑をかけないよう生活をしているので大きな過ちも少ないと思います。

赦しの秘跡を“罪”という観点で考えると、十戒にあるような大罪を犯す方はいないでしょう。しかし“自分の心のきれいさ”という観点で、赦しの秘跡を受けるのが良いと思います。“罪”がないから赦しの秘跡を受けなくても良いと言うのではなく、本当に自分の心が穏やかになっているか、安らいでいるかということを考えてみれば、穏やかな気持ちで過ごしている方は少ないと思います。時にはイヤな気持ち、時には不安な気持ちを持っているから、それを告白して神様から恵を頂く気持ちが必要です。

イエス様も聖書によると一度だけ感情を荒げたところがあります。神殿の中で物を売ってお金を儲ける人に対してでした。その時イエス様が怒ったことと私達が怒ることは違います。私達が怒るとその感情はずっと残ってしまいます。怒ったことで心が安定する人は一人もいません。子供を叱ってもその後、心がすっきりしません。

心がきれいになるための赦しの秘跡が必要です。ですから赦しの秘跡を受ける時は、“過ち”ばかりに捕らわれず、自分が今どういうことで苦しんでいるか等を言っても良いと思います。その時、司祭

と一緒に話し合い、理解してもらえれば、完全には癒されなくても神様の恵は感じる事が出来ると思います。むしろ神様が完全に癒して下さったとしても、私達の心が完全に成長していないから「完全に許してもらえなかった」という気持ちになるのかも知れません。神様の恵は完全ですから、出来るだけその恵を思い起こせる様に努力しなくてはなりません。

私は先週赦しの秘跡を受けました。その時とても悩みました。いつも心に引っ掛かっていたことで、告解したいと思いましたが、司祭としてどの様に見られるか、特に知り合いの司祭に自分が犯した罪を告白するのはとても勇気のいることでした。しかしそうしないと自分がすっきりしないから、耐えられないから、その神父様がどの様に思ってもかまわない、神様から許してもらおうと言う心だけで赦しの秘跡を受けました。受けた後は本当に心がすっきりしました。以前は「ここまで言ったから、神様も分かってくれるだろう」とその過ちの核心に触れること避けていたので、赦しの秘跡を受けた後もやはり心に引っかかりが残っていました。でも全てを神様の前に出して始めて「神様は許して下さい」という確信を得たから、もう二度と同じ過ちは犯さないという自信が生まれたのです。ですから、赦しの秘跡を受ける前には、自分の心を全部開こうという気持ちにならないと赦しの秘跡を受けても心が穏やかにならないのです。

そして、赦しの秘跡を受ける理由は“回心”です。以前は“改心”という文字を使っていました。何が違うのでしょうか。“改める”という方が分かりやすいですが、私達が“回心”するという事は、心を改めるということ、これから悪いことをしないで善を行うということだけではないのです。昨日の福音の中でファリサイ派の人と徴税人が神殿に行って祈ることが書かれていました。ファリサイ派の人は「神様のお陰で私は罪犯していません。週2回断食をしています。収入の多くを神様に捧げています」と祈りましたが、徴税人は神殿に向かって祈ることさえはばかり、「罪人である私を哀れんで下さい」と祈ったのです。そして神様から許してもらったのは、罪ばかり犯しているとされる徴税人であると教えます。何故？ファリサイ派の人の様に私達の尺度の中で、良いことをしたか、悪いことをしたかということではなく、私達の気持ちがどこにあるかを神様が見て下さるのです。紙一重という言葉があります。いくら自分が立派なことをしたとしても、神様の立場ではどれも同じです。自分にとっては、他の人より良いことであっても、それはあまり変わりません。神様は天地の創造主で、私達を創造された方だから、いくらでも私達を作ることが出来るので、いくら私達が良いことをしたからといって、それで認められるのではなく、重要なことは私達が神様の前に立って「自分は何の意味もない。神様の恵がないと生きて行けない」と神様に言える人こそ神様の子供になれるのです。そういう意味で改めるという意味よりは、神様の方に心を回そうという意味で“回心”という字を使います。ですから回心とは、神様が何を望んでおられるか、神様の方に向くためには何をすれば良いかを考えることが本当の回心の意味ではないかと思います。その様な気持ちで赦しの秘跡を受けると必ず神様が聖霊を送って下さいます。

また、私達は傷つけられることもあります。むしろ自分が他人を傷つけこともたくさんあると思います。しかしその傷つけたことも神様から許して貰わないと気が安まらないのです。昨日、私はある信者の家庭でご飯をご馳走になった際、余計な一言を言ってしまいました。家に帰ってその人を傷つけてしまったのではないかと気付き、メールで「すみませんでした」と送りましたが、なかなか返事が来ないので落ち着きませんでした。その後「大丈夫ですよ」という返事をもらい心が休まりました。

この様に自分の知らないうちに人を傷つけていることも結構あります。何故かというと、私達は育った環境も違うし、考え方も違うから自分の一言が相手にどの様な影響を与えるかは誰も知らないからです。私は韓国人ですから「韓国人は・・・」と言ってしまいますが、韓国の人からは「そんなこと言わなくても」と不快に思われているかも知れません。同様に知らないうちに傷つけられることもあります。その時は気付かなくても後になって、ものすごく怒る様なこともあります。だから傷つけることもあるし、傷つけられることもあるから、その様なことを全部含めて神様の前で、「自分の気持ちはこ

のようになっていきます、この様な状態です、許して下さい」という気持ちになれば、必ず神様は新しい気持ちを与えて下さいます。

私達が復活祭を迎える心の準備は色々あります。節制することや断食をすることがありますが、その色々なことの中で大切なことは心をきれいにする作業だと思います。心がきれいにならないと復活祭に与ったとしてもあまり喜びはないと思います。一生懸命四旬節を過ごして来た人が復活祭のミサに与った時の気持ちと、何の準備もしないで与った人の気持ちは全く違います。私は毎年、灰の水曜日には、今年はどういう気持ちで過ごすか、どういうことを決心したかを必ず言います。何故かと言うとそれを言ってしまえば、守らなければならないから守るように努力するためです。そうすると40日はとても永く感じます。普段はさっと過ぎてしまう月日ですが、まだか、まだあると思ってしまう。今年毎日一人を選んでその人のために祈ると決心しました。しかし忙しかったりするとついお祈りをさぼりたくなることもあります。けれど決心したことを皆の前で言ってしまうので、守らなくてはならないから祈ります。だから四旬節は辛いです。早く復活祭が来れば良いという気持ちになります。

私達が四旬節を過ごすためには心の準備は大切です。何もしないで四旬節を過ごすと、毎年四旬節が来ても、復活祭が来ても心の状態が変わりません。喜びを得るためにはその準備の段階として、心をきれいにすれば本当の喜びが得られると思います。

皆様は色々なことをしてこの四旬節を過ごしていらっしゃるかと思いますが、あと残りの期間を、どの様に過ごせば良いかということ深く考えて、喜びが与えられる復活を迎えられるよう祈っています。

ありがとうございました。